

「防災講話を聞いて」

from 豊山中学校

十二月十六日（水）に本校体育館で防災講話を聴く会を開催しました。講師に、元岩手県陸前高田市立米崎中学校長の阿部重人先生をお迎えし、「東日本大震災〜陸前高田市からのメッセージ〜」と題して講演していただきました。

阿部先生自身も東日本大震災を被災され、莫大な被害を受けられました。当時学校長だった阿部先生は、避難所で陣頭指揮を執り、復旧に向けご尽力されました。被災された方の言葉は重く、命の大切さを深く考えさせられた講演でした。その内容の一部と感想を紹介します。

津波に遭い、命を落とされた大勢の方々の遺体が、ある場所に安置されています。懸命に肉親の行方を探す人、探していた肉親が見つかり大声で泣き叫ぶ人、様々な人がそこにはいました。そんな中、肉親の兄を探すある三人の家族がいました。懸命に探す中、その兄に顔や背格好が似た遺体を見つけました。ホク口の位置や並び方も一致しています。家族の内二人は、兄と確信しました。しかし、家族の内一人は、DNA鑑定をしてほしいと依頼したそうです。兄と確信したにも



関わらずDNA鑑定を依頼した理由、それは、兄の死を受け入れられなかったからです。兄と認めてしまえば、その死を認めたこととなります。自分ではとても肉親の生死の判断をくだすことはできなかったのでしょうか。

震災当時、学校の体育館や教室は、多くの避難されてきた方たちに開放されました。運動場には、未だ仮設住宅が建っており、そこで生活している方たちがみえるそうです。普通に学校や家で生活することができている私たちは、そのことを当たり前だと思わずに、感謝しなければなりません。被災地の子どもたちは、運動場が使えないので、部活動も十分にすることができません。練習方法を工夫しながら活動しているそうです。部活動を十分にすることのできる本校の環境は、とても幸せであると思えました。

生徒たちには、家族の大切さや普段の生活のありがたみを感じることができるとなりました。当日は、東日本大震災教育支援基金の募金もあわせて行い、多数の保護者の方にご協力をいただきました。ありがとうございました。



第百八十七話

昔の家

昔の家では、庭を含めて屋敷全部が農作業のできる構造でした。

屋敷の正面には母屋という住屋があり、母屋に向かって右の手前には「はいびや」がありました。「はいびや」は土や農具が置いてありました。その奥には井戸があり、飲料用水や家事全般の水の供給源でした。また、その奥の母屋近くには便所がありました。母屋から離れていたため、子どもは冬の夜には寒くて怖くてなかなか便所に行きませんでした。

母屋の南側には広い「かど」と言う庭がありました。物を干したり、唐箕や脱穀作業をする作業場でした。子どもたちは、くぎ刺しや元大中小、しょうや、カッチンダマなどで遊んだ場所です。その向かいには「こうえ」と呼ばれる住むことができる建物がありました。

母屋は「おとぐち」という正面入り口の西側が大体四つに区切られており、東側の奥が勝手で土間の上に「くど」（今のガステーブル）が置かれていました。その手前の区

画は「まや」と呼ばれて、大昔は馬が飼われていたと思われませんが、古い家財道



具が置かれていました。「まや」からは天井裏に上る階段があり、稲藁や麦藁の束がいくつも保管されていました。

土間の「おとぐち」から入って、「あがりはな」に立ち西側を時計回りに見ると、手前が居間です。その奥が座敷で、床の間と仏間がありました。家族が寝たり、客を迎える場所です。

この二つの部屋の南側には廊下のような縁側が付いていて、農作業の休みにお茶を飲んだり、子どもたちがままごとをしたりしました。

座敷の北側は「納戸」で筆筒や布団が仕舞ってありました。その手前は「お勝手」となっていて、台所で作った食事を家族で食べたものでした。今は昔の物語です。

（豊山町文化財研究会の郷土文集を参考にしました）

